

モンゴル時代のチベット仏教に関する研究史的考察

矢澤知行

1. はじめに

チベット各地にはラサをはじめとする聖地が点在し、チベット仏教文化圏から多くの巡礼者たちを集めている。これらの聖地をめぐる巡礼は、いつ、どのようにして始まり、展開したのだろうか。こうした問いに対して、歴史研究者たちは、従来必ずしも十分な研究をもって応えることができなかった。その最大の要因は史料制約にある。前近代チベット史に関わる史料は、漢語史料をはじめとする“外部”の史料とチベット語史料とに大別されるが、このうち後者のチベット語史料は、年代記・伝記などを問わず、チベット仏教に関する宗教的叙述に彩られているため、そこから史実を取り出して歴史を再構成しようとする作業は非常に困難を伴うことになるからである。

ただ、チベットの文献史料の多くが宗教的視点から書かれ、その歴史性が希薄であるからといって、現実のチベットの歴史や社会が、政治から切り離されたものというわけではない。むしろ、チベットにおいては、宗教と政治が常に不可分の関係にあったから、研究者が史料に臨み、史実を解釈するにあたって、一見宗教的にしかみえないものに政治的な意図を、政治的な史実に宗教的意図を見出そうとする姿勢が求められるのである。

さて、本稿では、モンゴル時代におけるチベット仏教の受容・展開の過程について、宗教と政治の間の密接な関係に留意しながら研究史的考察を進める。そして、モンゴル時代が、チベット仏教の歴史にとって重要な転機となる時期であったということを具体的に指摘していきたい。

2. モンゴル時代におけるチベット仏教の受容

13～14世紀モンゴル時代、ユーラシア世界には“パクス・モンゴリカ”とも称される状況が生み出され、さまざまな宗教の聖地をめぐる巡礼旅行者たちの往来が活発化した。当時を代表する旅行者であるマルコ・ポーロ（1254～1324）やイブン・バットゥータ（1304～77?）らも、それぞれの聖地（イェルサレムとマッカ）への巡礼を一つの目的としていた。

チベット仏教にとってもモンゴル時代は重要な転機となる時期であった。そのことを象徴するのが、チベット仏教サキャ派の高僧パクパ（1235～80）の国師（後に帝師）就任である。10世紀以来、チベット各地では氏族教団ないし活仏教団が勃興し、諸宗派が乱立していたが、13世紀のモンゴル時代に入り、モンゴルのクビライ・カアン（1215～94）のもとでパクパが仏教界の頂点に位置付けられると、チベット仏教は、広大なモンゴル・ウルスの領域を介して、従来の枠をはるかに越える“チベット仏教文化圏”形成の足掛かりを得たのである。

クビライとパクパの初めての会見については、杉山正明氏の研究に詳しい〔杉山1991〕。二人の会見が実現したのは、モンケ・カアン（1208～59）時代の1253年、六盤山に駐営していたクビライのもとを、コデン王家のモンゲドゥがパクパを伴って訪れた時のことである。この会見は、クビライの宗教的情熱によって実

現したというよりも、むしろ政治的な意味合いの強いものであった。なぜなら、六盤山からチベット東部を経て雲南・大理に遠征する準備をしていたクビライにとって、サキャ派の高僧サキャ・パンディタ(1182~1251)の甥にあたるパクパとのつながりは、遠征経路の安全確保や事後のチベット経営のために有利に働いたからである。一方、パクパにとっても、自身や教団の強力な後ろ盾を得る絶好の機会だったはずである。

二人の会見から五年後、再び重要な契機が訪れた。1258年、クビライが兄帝モンケ・カアンに委ねられて開平府(後の上都)で開催した第三回の道仏論争である。道仏論争については、窪徳忠氏や中村淳氏らによる研究があり〔窪1987〕〔窪1992〕〔中村1994〕〔高橋1999〕、基礎史料『至元辯偽録』の詳細な検討も含め、その内容や意義についてかなりの部分が明らかにされている。これらの研究によると、三回にわたる道仏論争は“曹洞宗対全真教”という構図のもとに行われた。これは、当時の華北仏教界の主流が禅宗、とりわけ曹洞宗であり、一方、道教側は、金代に興りチングスのもとで隆盛を誇った全真教が優勢を占めていたためである。この論争の直接の原因は、全真教側が禅宗側に誹謗中傷や土地占拠を行ったことに対し、後者が不満を訴え、教義論争による解決をカアンに求めたものといわれる。しかし、その背景にはきわめて政治的な思惑が動いていた。華北の本格的支配に踏み込もうとしたクビライが、表向きには教義論争の形を装いながら、それまで華北の文書行政を仕切っていた全真教団を排除するために禅宗側を支援する方向を打ち出したのである〔高橋1991〕〔中村1994〕。

モンケ・カアンのもとで行われた第一回・第二回の道仏論争が基本的に一人対一人の御前論争の形式で行われたのに対し(厳密には第二回は不成立)、第三回論争には、仏教側三百余人、全真教側二百余人、審判役二百余人、総勢七百人を超える関係者が集められた。そして、このときパクパが仏教側の主要な論者として加わり、顕著な活躍を見せたのである。パクパは、この論争ののち、1260年にクビライがカアンに即位すると同時に国師に、ついで帝師に就き(1270年)、仏教界の最高位に昇りつめた。そして、その地位は長くサキャ派の高僧によって占められたのである。

では、もともと華北に基盤をまったく持たなかったチベット教団が、なぜこのように在地の禅宗の上に位置付けられたのだろうか。これまでの研究では、漢地の在来仏教界を掌握するための方策〔藤島1967〕〔藤島1975〕、あるいは、チベット経営のための政策の一環〔札奇斯欽1978〕などといった見方が提出されていたが、中村氏は、第三回道仏論争に光を当てることによってその具体像を示し、禅宗教団が全真教団に替わって台頭するのを事前に抑えるためにチベット教団をその上に据えたと述べる〔中村1994〕。また、乙坂智子氏は、多くの宗教の中でなぜチベット仏教が採択されたのかという問題について、中国在来仏教と同門異戸の関係にあった点や、モンゴル人支配者の伝統的な宗教観にきわめて忠実であったという点を挙げつつ、“元初におけるチベット仏教の受容とは、異文化の導入、新文化の創造である”と述べた〔乙坂1986-1〕。

以上のように、モンゴル・ウルスにおけるチベット仏教の受容は政治的な意図のもとに推進されたものであり、クビライのもとで描かれたチベット仏教を頂点とする宗教界の構図も、実はきわめて政治的な色彩を帯びたものだったのである。したがって、チベット仏教にとっての重要な転機、すなわち“チベット仏教文化圏”形成の端緒も、政治的なプロセスの中から生み出されたものということができよう。

3. モンゴル時代におけるチベット仏教の展開

クビライのもとでデッサンされたモンゴル・ウルスにおける宗教界の構図は、禅宗教団を利用して全真教団の勢力を抑え、さらに禅宗教団を抑えるため、その上にチベット仏教サキャ派の高僧パクパを置くというものであった。では、この構図はどのように具現化されていたのだろうか。また、チベット仏教はのちに

モンゴル朝廷の熱狂的な尊崇を受け、それがチベット僧の専横と社会秩序の乱れへとつながったといわれるが、チベット仏教とモンゴル朝廷の関係は実際にどのように変遷していったのだろうか。本節では、モンゴル・ウルスにおける宗教と政治の関係の展開過程について論を進めよう。

まず、元朝（大元ウルス）の対チベット政策の歴史的解明を手掛ける乙坂氏は、チベット仏教の採択には多分に政治的意図が含まれていたと述べる一方で、宗教文化本来の意味でのチベット仏教が摂取されたことにも目を向けるべきであると説く。氏によれば、モンゴル支配層にとってのチベット仏教は、伝統的価値観を保持したまま受容することのできる“新しい宗教”であり、チベット仏教の中でも“呪術的・尚武的な面”が選ばれ、あるいは補われて受け入れられたという〔乙坂1986-1〕。

たしかに、チベット仏教は、クビライ期を通じて朝廷仏教としての儀式的性格を強め、宮廷ではチベットの色彩の濃い国家仏事がとりおこなわれた。例えば、石濱裕美子氏は、パクパの仏塔建立記を始めとする二つの著作を分析し、クビライ初期の燕京（中都）に建立された金剛界仏塔には、モンゴル政権と新都の繁栄を密教的な世界から加護し、王族の冥福を祈るという役割が付託されていたと述べ、クビライ政権の発足当初から、パクパが国家宗教にとってきわめて重要な役割を果たしていたことを指摘する〔石濱2002〕。また、大都創建の初期にパクパの勧めによってなされたクビライの王権儀礼も、クビライが転輪聖王、すなわちチベット古代のソンツェンガムポ王に由来する理想の菩薩王であることを示すためのものであったという〔石濱1994〕。つまり、二つの首都造営の際に壮麗な演出が行われたことにも象徴されるように、クビライは、国家仏事の儀式にチベット仏教的な特色を盛り込み、パクパによる思想的な裏付けを持たせることによって、サキャ派の帝師を頂点とする宗教界の秩序を、衆人の目に晒しつつアピールしたのである。

さらに、中村氏が、少林寺聖旨碑などを手掛かりに解明したチベット仏教と華北仏教界の関係にも着目したい。氏によれば、クビライは、帝師パクパの下に、大都地区の万寿寺、河南の中岳嵩山少林寺、山東の東岳泰山靈巖寺を頂点とする曹洞宗三大勢力を置くことにより、仏教勢力全体を統括する体制を築いた。とくに、大都地区には、全真教や正一道教などの道教各教団の本山となる寺観も設けられ、クビライ時代の初期には、これら教団のトップクラスの僧侶や道士が歴代の住持となる体制が整備されたという〔中村1999-1〕。また、氏は、クビライ時代に大都地区に建立され、歴代皇族の御容を納める新御殿を有した勅建の九寺院について考察し、これらの寺院がチベット仏教様式で建立されていたこと、これらの寺院と太廟が政争の有り様を強く反映していたことなどを明らかにした〔中村1999-2〕。

そして、モンゴル時代におけるチベット仏教の位置付けをとくに象徴するのが、韓国・全羅南道の松広寺に伝わるチベット文“法旨”の存在である。中村淳・森平雅彦両氏は、この“法旨”の解読に成功するとともに、それがチベット仏教サキャ派帝師の発した特許状の貴重な現物であることを明証した〔中村・森平2002〕。これは、モンゴルの政治的権威に裏打ちされたチベット仏教の宗教的権威が、朝鮮半島南部を含むかなりの広範囲に及んだことを具体的に示す重要な成果といえよう。

以上のことから、先述の第三回道仏論争以降、クビライが推し進めた“宗教政策”の具体像とは、道仏の各教団の自律性を残しながらも、それらの間に一定の序列を設け、カアン自身はチベット仏教的色彩の濃い儀礼を行うことによって、サキャ派の帝師を頂点とした宗教界の秩序を整えようとしたものであることがわかる。

では、このような宗教界の秩序、あるいはモンゴル帝室とチベット仏教の関係は、その後、どのように移り変わっていったのだろうか。一般的には、モンゴル朝廷による過剰な尊崇のもとで大規模な仏事法要、仏塔の建立、チベット僧への賜与が行われ、それによって莫大な国費が消耗され、また、常軌を逸する厚遇を受けたチベット僧の専横が社会の秩序を乱し、民衆の激しい反発を生んで、モンゴル北走の一因をつくったといわれる。村岡倫氏は、チベット仏教をめぐるこうした腐敗と混乱の状況が訪れるまでに、何らかの転機

が見出せるはずだという点に着目し、クビライ期以降のモンゴル政権とチベット仏教の関係について考察した。氏は、クビライに続く成宗テムル（1265～1307）の時期に呪術的チベット僧タンパ（?～1303）が重用され、チベット仏教崇拝の弊害が初めて認められることや、テムルと敬虔なムスリムであった安西王アーナンド（?～1307）との間の宗教対立が表面化したことを指摘した〔村岡1996〕。

一方、チベットと大元ウルスの政治的（あるいは外交的）関係はどのように変遷したのだろうか。従来の研究としては、帝師に対し元朝（大元ウルス）からチベット統治権が賦与されたとの指摘〔野上・稲葉1958〕〔稲葉1966〕や、仏教行政機関である宣政院にチベット統監という第二の職掌が与えられたとする説〔藤島1967〕などがある。しかし、帝師や宣政院の具体的活動については考察の余地があり、とくにモンゴル・ウルスが有していた、あるいは帝師に委ねられていた“統治権”とは具体的にどのようなものか、という問題が残る。

そこで、乙坂氏は、経済的・軍事的重要性が必ずしも高いとはいえないチベットを元朝（大元ウルス）がなぜ“統治”しようとしたか、という問いに立って考察を行った。氏は、1292年の“リゴンパ（ディグン派）の乱”の勃発と鎮定をめぐる元朝とチベットの関係の推移を辿り、サキヤパ（サキヤ派）が元朝の軍事力を利用して対抗勢力を倒し、政権を樹立したことに注目した。そして、この事件がチベット史の流れ——チベットのはたらきかけが強く作用して中国王朝との政治的関係が開かれるという傾向——を定める転機になったという〔乙坂1986-2〕。さらに氏は、サキヤ派内部の権力構造についても検討を加え、同派の頂点にあったサキヤ寺座主の権力の消長を分析することにより、元朝とチベットの関係が、“元朝によるチベット間接統治”から次第に“チベット側による元朝の利用”へと変質していったと結論づけた〔乙坂1989〕。

乙坂氏の所論は、元朝のチベットに対する外交政策のうち高麗やウイグルに対する施策との相似を見出そうとするもので、クビライ期のチベット政策についても、それは軍事的な必要に迫られたものではなく、むしろ理念的な政策方針、すなわち“属国”イメージをチベットにも投影しようとしたものとする〔乙坂1990〕。この理解に従えば、大元ウルスが経済的・軍事的重要性の低いチベットをなぜ“統治”しようとしたか、という先述の問題に対し、一定の回答を示すことができるかもしれない。

しかし、モンゴル時代以降、明清～現代まで包括して考えると、チベットと中国の関係は非常にデリケートな問題をはらんでいる。チベットの自立性をめぐる問題である。この問題に対する本邦の研究者の姿勢はさまざまであり、例えば、乙坂氏は、チベットを対中国関係の文脈の上において捉え、中国側のチベットに対する統治理念のあり方を論じる傾向にあるのに対し〔乙坂1990〕〔乙坂1997〕〔乙坂1999〕〔乙坂2003〕、石濱氏はチベットの側に視点を置いて、チベット仏教的な歴史認識や文化様式がモンゴルや満州においても共有されていたことを論じている〔石濱1999〕。両氏の論はいずれも説得力があり、端的に言えば、前者は政治的側面から、後者は宗教的側面からチベットの対外関係を論じていることになる。つまり、政治的にみれば対中国関係を無視して論ずることはできないが、宗教的にみればむしろチベットの枠を超えた広範な“チベット仏教文化圏”が想定されるのである。そして、先述のように、チベットにおける宗教と政治の関係が密接不可分である以上、両論は並立せざるを得ないのであり、したがって、例えば“チベット自立の正／否”といった二者択一の議論を成立させることはもとより困難なのである。

さて、13～14世紀モンゴル時代に“チベット仏教文化圏”形成への足掛かりを得たチベット仏教は、その後、さらなる展開を見せることになる。すなわち、ツォンカパ（1357～1419）がガンデン大僧院を創建し、ゲルク派を興すと（1409）、信者は拡大して教団組織も堅固なものとなり、さらに、モンゴルの後裔アルタン・カン（1507～82）が、ゲルク派の高僧ソナムギャムツォ（1543～88）にダライラマの称号を授けたことにより（1578）、チベット仏教は世俗権力と結託してその地歩を固めた。同教団がモンゴルに定着したのもこの時期以後のことである。そして、1642年のダライラマ五世（1617～82）によるチベット統一の背景に、

同じくモンゴルの後裔グシ・カン (?~1654) の存在があった点も見逃すことができない。

以上に述べてきたように、モンゴル時代におけるチベット仏教の受容・展開の過程は、クビライとパクパの邂逅に始まり、道仏論争を経て、帝師パクパを頂点とする宗教界の秩序が構築されるまで、きわめて政治的な色彩を帯びたものであった。その後の、ドライラマ五世によるチベット統一に至る過程も同様である。しかし同時に、その過程は、チベット仏教の側からみれば、広大なモンゴル・ウスの領域を介して“チベット仏教文化圏”を形成していくプロセスでもあった。韓国松広寺のチベット文“法旨”は、モンゴルの“政治的権威”の裏打ちがあって発せられたものであったが、他方において、首都造営の際の王権儀礼は、チベット仏教のもつ視覚的・思想的な魅力を政治の舞台で巧みに利用したものであった。このように、モンゴル時代における政治と宗教の関係は、密接不可分に結びついていたのである。

4. おわりに ～チベット巡礼史の進展に向けて～

本稿では、モンゴル時代におけるチベット仏教の受容・展開の過程について、宗教と政治の関係に着目し、先行研究を整理しながら論じてきた。当時の巡礼の実態についてはほとんど不明だが、モンゴル時代はチベット仏教の“王権儀礼”的な性格が強調された時期でもあるから、民衆レベルの巡礼がチベットの枠を超えてさかんに行われたとは考えにくい。憶測に過ぎないが、チベットへの巡礼者がモンゴルなどから集まるようになるのは、16~17世紀以降のことであろう。実証的研究は今後の課題である。

最後に、巡礼史研究の視点について簡単に触れておきたい。まず、歴史的に見て、巡礼の隆盛の背景に宗教的要素以外のさまざまな客観的条件があることは、もっと注目されてもよい。例えば、社会経済的基盤、とりわけ交通ネットワークの整備などがそれである。モンゴル時代にも、ジャムチ・ルートすなわち駅伝の道がチベットの聖地ラサに向けて伸張し、各地に駅が設置された。モンゴル時代以前の駅伝については霍巍氏による研究などが見られ、すでに吐蕃時代に交通路の開かれていたことが考古学的史料からも明らかにされており [霍1996]、モンゴル時代のジャムチについても、蔡志純・洛桑群覚・陳慶英各氏による研究があり、その具体像は仄見えてきている [洛桑・陳1984] [蔡1984]。そもそも、チベットにおいて寺院（ゴンバ）の所在地は政治・経済の中心地としても機能し、それらを結ぶ巡礼路は社会・経済的重要性を備えていたから、モンゴル時代のチベットにおいて整備が進められたジャムチ・ルートを、寺院や巡礼路との関係から新たに捉え直してみることも意味があろう。その他、チベット社会と仏教の関わり、とりわけ聖（僧侶）一俗（信者）関係のあり方からチベット仏教や巡礼の歴史を再考することも必要であろう。以上のような視点に立って、さらに牛歩を続けていきたい。

《主要参考文献》

- 石濱1994 石濱裕美子「パクパの仏教思想に基づくクビライの王権像について」『日本西藏学会会報』40、pp.35-44.
- 石濱1999 石濱裕美子「チベット、モンゴル、満洲の政治の場で共有された「仏教政治」思想について」『早稲田大学教育学部学術研究 地理学・歴史学・社会科学編』48、pp.25-40.
- 石濱2002 石濱裕美子「パクパの著作に見るクビライ政権最初期の燕京地域の状況について」『史滴』24、pp.249-226.
- 稲葉1966 稲葉正就「元の帝師に関する研究 — 系統と年次を中心として —」『大谷大学研究年報』17、pp.79-156.
- 乙坂1986-1 乙坂智子「元初におけるラマ教受容」『社会文化史学』22、pp.47-59.

- 乙坂1986-2 乙坂智子「リゴンパの乱とサキヤバ政権—元代チベット関係史の一断面」『仏教史学研究』29-2、pp.59-82.
- 乙坂1989 乙坂智子「サキヤバの権力構造—チベットに対する元朝の支配力の評価をめぐって—」『史峯』3、pp.21-46.
- 乙坂1990 乙坂智子「元朝チベット政策の始動の変遷—関係樹立に至る背景を中心として—」『史境』20、pp.49-65.
- 乙坂1997 乙坂智子「元代「内附」序論—元朝の対外政策をめぐる課題と方法」『史境』34、pp.29-46.
- 乙坂1999 乙坂智子「元朝の対外政策—高麗・チベット君長への処遇に見る「内附」体制」『史境』38/39、pp.30-53.
- 乙坂2003 乙坂智子「元朝の対チベット政策に関する研究史的考察」『横浜市立大学論叢 人文科学系列』55-1、pp.247-266.
- 霍1996 霍巍／高橋庸一郎訳「考古学的資料からみた吐蕃と中央アジア及び西アジアとの古代の交通（上・下）」『阪南論集』32-1/2、pp.97-103/ 45-56.
- 窪1987 窪徳忠「元代の仏道関係—『至元弁偽録』を中心として」『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』20、pp.9-19.
- 窪1992 窪徳忠「モンゴル朝仏道論争研究序説」『モンゴル朝の道教と仏教』平河出版社、pp.115-150.
- 蔡1984 蔡志純「元代吐蕃駅略述」『西藏研究』1984-4、pp.52-56.
- 札奇斯欽1978 札奇斯欽『蒙古与西藏関係之研究』国立政治大学叢書.
- 杉山1991 杉山正明「東西文献によるコデン王家の系譜」『史窓』48、pp.181-202.
- 高橋1991 高橋文治「太宗オゴデイ癸巳年皇帝聖旨訳注」『追手門学院大学文学部紀要』25、pp.442-405.
- 高橋1999 高橋文治「クビライの令旨二通—もう一つの「道仏論争」」『アジア文化学科年報』2、pp.64-76.
- 中村1994 中村淳「モンゴル時代の「道仏論争」の実像—クビライの中国支配への道」『東洋学報』75-3/4、pp.229-259.
- 中村1999-1 中村淳「クビライ時代初期における華北仏教界—曹洞宗教団とチベット仏僧パクパとの関係を中心として」『駒沢史学』54、pp.78-97.
- 中村1999-2 中村淳「元代大都の勅建寺院をめぐって」『東洋史研究』58-1、pp.63-83.
- 中村・森平2002 中村淳・森平雅彦「韓国・松広寺所蔵の元代チベット文法旨」『内陸アジア史研究』17、pp.1-22.
- 野上・稲葉1958 野上俊静・稲葉正就「元の帝師について」『石浜先生古稀記念東洋学論叢』.
- 藤島1967 藤島建樹「元朝宣政院考—その二面的性格を中心として—」『大谷学報』46-4、pp.60-72.
- 藤島1975 藤島建樹「元朝における政治と仏教」『大谷大学研究年報』27、pp.141-186.
- 村岡1996 村岡倫「元代モンゴル皇族とチベット仏教—成宗テムルの信仰を中心にして」『仏教史学研究』39-1、pp.79-97.
- 洛桑・陳1984 洛桑群覚・陳慶英「元朝在藏族地区設置的駅站」『西北史地』1984-1、pp.66-75/13.